



お客様撮影のほほえましいツーショット。動くものと動かぬもの。旅するものとずっといるもの。



“愛すべき小さな田舎” からの小さなたより

第5回

わが法人のミッションと町内の子どもたちを対象とした取組み

星ふる学校「くまの木」

(特定非営利活動法人 くまの木 里の暮らし)

加納 麻紀子

〽️ ぐん日差しが強くなり、命がもりもり育つ。BGMというにはあまりにも大音量で響き渡る

カエルの大合唱、玄関先でのツバメの子育て、それを狙うはアオダイショウ、夜の道路にきらりと光る目はキツネやタヌキ、空にはトンビ、夜はフクロウの声、間近で見られるサギ、カモ、キジ、そして、大きさも形もさまざま、とにかくたくさん虫たち！人口は少ないかもしれないけれど、この命の総量、すごいなあ、と心の底から感じ入る。生きてる、生きてる、みんな生きてる、わたしも生きてる。雨のあとお日様が顔を出してぐっと気温が上がると、草の伸びも本当にすごい。草刈り作業は大変だけれど、この迫力、嫌いじゃない。たくましいなあ、すごい力だなあ、と感心してしまう。

もちろん人間の営みとの関係の中で起きている、生きものたちにかかわる問題、また、その全体のつながりの問題は深刻だ。地域全体を見渡せば、草の伸び具合に感心している場合なんかじゃない。でも、いろんなことに素直にびつくりしたり、おもしろがったりしながら前向きに暮らしたいなあと思う。時代により姿を変えるにせよ、地域はそれまでの歴史の積み重ねの先に続いていくものだと思う。いいところも悪いところもひっくりかえり、続いてきたことに感謝し、またそうやって続いていく一部に自分があることを楽しみたい。

わたしが事務局長を務めているNPO法人くまの木の暮らしは、「次世代につながる魅力ある地域づく

校舎の裏山でオリエンテーリング。グループをつくってクイズやお題をクリアしていきます。グループ内でもめごとも起きますが、それも成長の糧。



みんなで作って外で食べるごはんは本当においしい！ こういうときに保護者の方々から農産物の差し入れがすごいことになるのは地域性ですね。

りへの寄与」を使命としていて、中心事業である星ふる学校「くまの木」の管理・運営も、これに沿った方針で行っている。地域に愛されてきた木造校舎や、地域で育てられた農産物をはじめ、さまざまな地域の資源を扱うあたり、無理な背伸びまではしないけれど、「ありのまま」と「懐かしさ」だけではなく、「今」、そして、「これから」という目線でも評価するか、



水辺の生きもの調査は、荒川にざぶざぶと。生きもの調査だから遊びだかわからなくなるものまたよし。水の冷たさ、流れの力強さを全身で感じる。おいしいようなカジカを捕まえて大人が喜ぶ。たくましく育て、塩谷っ子!

地域内外のとくに若い世代の人たちにもっと魅力を感じてもらえるような見せ方は……という点での工夫を心がけている。

NPO法人くまの木里の暮らしは、もともと、旧熊ノ木小学校を宿泊型体験交流施設として活用する際に、その担い手となる法人として平成十三年に立ち上げられたもので、立ち上げ当初の名称は「塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合」という、まさに旧小学校の管理を中心とすることを表したものだ。事業を展開していく中で、一義的な旧小学校の管理・活用ということから、地域の課題や未来への貢献へと事業の捉え方も変わり、また、取組みの範囲も広がり、平成二十六年に

名称を変更した経緯がある(ちなみにわたしは平成二十二年七月に着任した二代目の事務局長です)。

星ふる学校「くまの木」の運営に比べるとポリユーム的にささやかではあるが、ずばり町内をターゲットにした事業にもコツコツと取り組んできている。平成十六年度に開始して現在も継続しているのが、町内の小中学生を対象とした「くまの木自然クラブ」という活動だ。これは、年間会員として登録した町内の子どもたちを対象として、毎月一回、地域の自然をテーマにしたプログラムを実施するもの。身近な自然に親しむ機会を作り、地域の自然の魅力を感じてもらうことをねらいとしており、自然豊かな地域で楽しく遊んで育ったという経験をもって、生まれ育った場所を大切に思える人になってほしいと願って企画している。今年度のプログラムは、田んぼの生きもの調べに始まり、高原山の石を調べよう、裏山オリエンテーリング、水辺の生きもの調査、化石探し、地元の名人に教わるわらリースづくりなど。野外炊飯やナイトハイクを行う一泊二日の合宿も年に一回実施している。できるだけいろんな切り口で自然にふれてもらうように考えているが、これを支えてくれているのは、総勢二〇名ほどの多様なボランティアスタッフ。生きものだけでも、哺乳類、鳥類、両生爬虫類、魚類、昆虫、植物とそれぞれ詳しい人がいて、また化石、火山・地質、山登り、そして、分野を問わず子どもたちと自然の中で遊ぶのが得意という人にも力を発揮してもらっている。年齢は二十代から六十代まで、本業もいろいろ。どうやっ

て集めたの? とよく聞かれるが、知り合いが知り合いを呼び、という人のつながりで広がって今に至る。「次世代につながる魅力ある地域づくり」のひとつのポイントは生き生きとした、ちょっとおもしろい(そして、できればステキな)大人の姿かな、そして、とくに子どもたちにそんな姿を見てもらうことかな、と思うので、さまざまな角度から楽しく活動にかかわってくれる人はとてもありがたい。

ちなみに、この「くまの木自然クラブ」の会員だった子が、一昨年度、塩谷町役場に入り、現在、当法人のある助成金の担当をしてくれている。くまの木で次世代を育てる!と気負っているわけではないけれど、こういう話はやっぱりちょっとうれしいものです。



別の学校の子、親でも親戚でも先生でもない大人と一緒に過ごすのも小さな町では貴重な機会かも、と思います。UNO!トランプ!怖い話!と夜はまだまだ続く……。